

政治研究結果報告書

—政治研究助成—

一般財団法人 櫻田會
理事長 増田 勝彦 殿

西暦 2025 年（令和 7 年） 2 月 19 日

研究者名 大久保 健晴

大学名・職位 慶應義塾大学・教授

第 42 回（令和 5 年度）櫻田會政治研究助成による研究を下記のとおり実施しましたので、その結果について報告します。

※印の記入項目に関する貴會ホームページへの掲載についても同意いたします。

記

※研究の名称（英語も記入） Research Theme

江戸と明治を架橋するグローバル・インテレクチュアル・ヒストリー

—オランダ啓蒙と近世蘭学の交錯—

The Influence of Dutch Enlightenment in Nineteenth Century Japan

—From the Perspective of Global Intellectual History—

※英文抄録（研究目的、経過、成果 250words 以内） Abstract (Purpose, Process, Significance)

In recent years, the study of global history has elucidated the political situation and trade flows surrounding Tokugawa Japan. It can no longer be described as “isolated.” From the 18th century, Japanese scholars and politicians proactively acquired knowledge of world affairs and Western sciences through Dutch studies, Rangaku. The encounter of Japan with the Western world traces back to Dutch studies during the Tokugawa period.

This study aims to examine the encounters with the Dutch Enlightenment in nineteenth-century Japan from the perspective of global intellectual history, and to rewrite the history of Japanese political thought that bridges the Edo and Meiji periods.

In particular, this study sheds light on the influence of the activities of academic voluntary associations, such as “Maatschappij tot nut van ‘t algemeene”, on Dutch studies in Japan. I visited the Netherlands in the summer of 2024 and researched the historical documents at the Leiden University Library, the National Archives in the Hague and the Edam Museum. Through this research, I clarified how the physics, geography and grammar books published by the Dutch voluntary associations were imported and translated by Japanese scholars such as Sanei Koseki, Rinsho Aochi and Genpo Mitsukuri. Their intellectual struggle with Western Sciences planted the seeds to build the foundation of civilization in Modern Japan.

The article based on this research will be included in my new book, *History of Political Thought on Dutch Studies*, which planned to be published in 2025.

※研究の目的・研究方法・意義（日本文 600 字以内）

本研究は、オランダにおける啓蒙主義の展開と、それが近世日本の蘭学に与えた影響を Global Intellectual History (グローバル知性史) の視座から解明し、江戸と明治を架橋する新たな日本政治思想史を描くことを目的とする。

近年、国境を越えて移動するヒト・モノ・情報に光を当てるグローバル・ヒストリー研究の進展により、徳川日本を取り巻く世界史の動向や交易の流れが解明され、旧来の「鎖国」像の批判的検討が進んでいる。もはや、江戸と明治の切断面を強調するこれまでの歴史認識は自明のものではない。そして、江戸時代の学者たちが世界の情勢や学問を知る手がかりとしたのが、蘭学であった。西洋世界との出会いは、徳川期の西洋学・蘭学に遡って考える必要がある。

他方でヨーロッパでは、Jonathan Israel, *Democratic Enlightenment* (Oxford University Press, 2013) などを通じて、オランダ啓蒙の研究が目覚ましい発展を遂げている。

本研究では、オランダ啓蒙の一特徴である、「一般の利益のために」協会をはじめとした民間の自発的な学術結社の活動に光を当てる。こうしたオランダの学術結社が出版した物理学や地理書、文法書の多くが、オランダ東インド会社を通じて近世日本に輸入された。高野長英や小関三英、箕作阮甫、福澤諭吉ら蘭学者は、そこから西洋学や国際情勢の情報を得ていた。

西洋世界と東アジアの交渉史を比較政治思想の視座から解明し、近世蘭学を補助線として近代日本の国家形成の特質を分析するところに、本研究の意義と独創性がある。

※研究経過と結果の概要（以下の欄に 35 行以内(1500 字程度)にまとめる）

本研究では、第一に、W. W. Mijnhordt, *Tot Heil van 't Menschedom: Culturele genootschappen in Nederland, 1750-1815* をはじめとした先行研究を手がかりに、フランスやスコットランドの啓蒙思想との比較を通じて、18 世紀オランダにおける学問潮流について検討を行った。そこからは、連邦共和国という分権的な政治体制をとったオランダでは、国家主導ではなく、それぞれの州や街で、学者とともに一般の市民も参加した、自由な民間の学術結社が興隆し、18 世紀後半、教育や出版の世界で大きな影響力を有したことが明らかになった。

そこで第二の課題として、それを実証的に確かめるために、2024 年 8-9 月にオランダに渡り、研究ならびに史料調査に従事した。特に、ライデン大学図書館、ハーグの国立公文書館、エダム博物館、ハールレムのテイラーズ博物館などを訪れ、18 世紀後半から 19 世紀のオランダにおける自発的な学術結社の活動について調査し、研究を深めた。そこでは、「一般の利益のために」協会(“Maatschappij tot nut van 't algemeene”)が発行した年鑑や、同協会の懸賞論文をもとに公刊された書物群を中心に、手書きの書簡などを含め、多くの貴重資料を幅広く渉猟した。

第三の作業として、そこで収集した史料の読解に取り組むなかで、オランダの知的状況と徳川日本における蘭学との接点を探った。江戸時代、蘭学者たちは、オランダの「一般の利益のため

に」協会から出版された実に多くの書籍を手に取り、翻訳した。例えば、「ガランマチカ」「セインタキス」として呼ばれたオランダ語の文法書は、箕作阮甫の手によって、天保年間から嘉永年間にかけて、『和蘭文典 前編』『和蘭文典 後編 成句論』として翻刻された。また、物理学の入門書である *Natuurkundig schoolboek* や *Volks-natuurkunde* も、江戸時代の蘭学者たちの中で広く読まれた。青地林宗は文政 10 年に出版した『気海観瀾』のなかで、*Natuurkundig schoolboek* の一部を抄訳している。その後、同書は『格致問答』として、た。 *Volks-natuurkunde* は、『理学訓蒙』として、それぞれ翻刻・出版された。プリンセンの地理書もまた、徳川政権の天文台につとめた小関三英によって『新撰地誌』として訳述され、その後、箕作省吾の『坤輿図識』でも活用された。この地理書は、渡辺崋山や高野長英ら蘭学者たちに、専制君主制、制限君主制、共和制という、西洋世界における政治制度についての学識を提供した。

本研究では最後に、こうした調査と研究の成果をもとに、それぞれの原典と翻訳とを綿密に比較し、オランダの自発的結社の学問活動が、徳川日本の蘭学へと及ぼした影響について、政治思想史の視座から解明を試みた。そこからは、次のことが明らかになった。オランダは 18 世紀後半より 19 世紀前半にかけて、ネーデルラント連邦共和国の解体からフランスへの併合を経て、ふたたび独立するという大きな政治変動を経験した。とりわけ 1810 年代に王国が樹立される過程で、オランダという祖国への愛が高まり、オランダ語文法の知識を国民に広めることが強く求められるとともに、貧困層も含めた国民一般へと実践的な学問を普及することの重要性が主張された。徳川後期の日本には、蘭学を通じて、啓蒙の世紀から王国の建設に至るなかで展開されたオランダの学問思想が流れ込んでいる。

本研究は以上の検討から、江戸時代の蘭学者による西洋学術との思想的格闘が、文明化を目指して新たな国家を構想する明治期以降の政治思想の基礎を形作ったことを明らかにした。

※研究成果の発表・著書、論文、学会報告等（あるいは発表の計画や形式等）

本研究成果について、現在、論稿を執筆しており、それは近く刊行予定の単著『蘭学の政治思想史』（仮題）における、重要な議論の柱となる。さらに、2025 年 5 月にイギリス・ロンドンで予定されている Japanese intellectual History のワークショップにおいて、その成果を基礎とした研究報告を行う予定である。

〔注〕 文責は貴研究グループに負っていただきます。個人情報等には十分ご注意ください。